●プロフィール

徳永二男は、横須賀市に生まれ、ヴァイオリニストであった父と鷲見三郎に師事してヴァイオリンを学ぶこととなりました。そして毎日学生コンクール小学校の部で第1位を獲得するなど早くからその才能を発揮した彼は、1962年に桐朋学園高校音楽科に入学し、小澤征爾や秋山和慶らの師として知られる名教授の斎藤秀雄のもとでさらに研鑽を重ねました。その後、1965年に第34回音楽コンクールに入賞を果たした彼は、早くもその翌年に東京交響楽団のコンサート・マスターに就任し、日本楽壇史上最年少のコンサート・マスターとして注目を集め、ソリストとしても精力的な活動を開始するまでに至っています。

しかし、さらに研鑽に意欲を燃やす徳永は1968年に文化庁海外派遣研修生としてベルリンに留学し、ミッシェル・シュヴァルベのもとで技を磨き、1974年には、第5回チャイコフスキー・コンクールでディプロマ賞を受賞しています。そして、この頃から海外でも華々しい演奏活動を行なうようになった彼は、ブルガリアやソヴィエト各地でリサイタルを開催したり協奏曲をオーケストラと協演したりして好評を博していますが、その秀れた力量を広く認められることとなった彼は、1976年にNHK交響楽団のコンサート・マスターに就任しています。

それからの徳永は、NHK交響楽団のコンサート・マスターとして活躍を続けるだけに留まらず、ソロや室内楽の領域でも活発な演奏活動を行ない、現在の彼は、我が国で最も多忙なヴァイオリニストとなるまでにも至っています。ちなみに、彼の使用楽器は、1716年製の銘器ストラディヴァリウスだということです。

このアルバムで徳永二男と協演している前島園子は、桐朋学園高校音楽科と同大学に学び、岡林千枝子、井口愛子、斎藤秀雄らに師事したピアニストです。1969年に桐朋学園大学を首席で卒業した彼女は、その翌年にオーストリアに留学し、モーツァルテウム音楽大学に入学しました。そして、1973年に同大学を首席で卒業し最優秀賞をも得た彼女は、モーツァルテウム財団からリリー・レイマン・メダルを授与された他、ジュネーヴ国際コンクールやエット・レ・ポッツォリ国際ピアノ・コンクールにも入賞を果たし、ヨーロッパ各地でソロや室内楽等に意欲的な活動を開始しています。なお、現在の彼女は、モーツァルテウム音楽大学の講師を務める傍ら、オーストリアを本拠としてヨーロッパ各地で活発な演奏活動をも続けています。

●ヴァイオリン名曲集　愛の喜び・ユーモレスク

徳永二男/チゴイネルワイゼン76/45

徳永二男(ヴァイオリン)　前島園子(ピアノ)/全11曲(55'03")

Side 1
1. チゴイネルワイゼン(サラサーテ)……7'59"
2. スペイン舞曲(ファリャ～クライスラー)……3'15"

Side 2
1. ラ・フォリア(コレルリ)……10'37"
2. ユーモレスク(ドヴォルザーク)……3'05"
3. 亜麻色の髪の乙女(ドビュッシー)……2'37"

Side 3
1. モスクワの想い出(ヴィエニアフスキー)‥7'36"
2. カプリース 第24番(パガニーニ)……4 06"
3. 愛の喜び(クライスラー)……2 56"

Side 4
1. 序奏とロンド・カプリチオーソ(サン=サーンス)…8'40"
2. ハンガリア舞曲 第5番(ブラームス)…2'30"
3. 美しきロスマリン(クライスラー)……1'47"

制作にあたって

DAM会員の皆様、日頃のご愛顧、誠にありがとうございます。また、前回の第25回頒布会で、予想をはるかに越える多数の皆様の御支持をいただき、カートリッジの重要性を、あらためて痛感した次第です。

カートリッジの性能や音質チェック用に「DAM45・オーディオ・チェック・シリーズ」の企画を始めて11年、今回の2作で合計46種類となりました。(この他に「VIP・45」が8種類あります。)その内、DAMオリジナル録音は今回で21作を数え、クラシック音楽の分野では、ギター、合唱、吹奏楽、室内オーケストラ、大編成オーケストラ(2回)、ピアノ、パイプ・オルガン、コーラス・アンサンブルを取り上げています。

DAMとしては、ピアノに次いでポピュラーな小品が多いヴァイオリン曲を、オリジナル録音したいと思っておりましたが、諸般の事情でなかなか実現せず、今回やっと永年の念願がかなって、「徳永二男⊙チゴイネルワイゼン」が完成いたしました。

徳永二男氏は、NHK交響楽団の第一コンサートマスターを務められ、皆様もTV等で良く御存知のことと思いますが、日本を代表する実力派ヴァイオリニストとして、ソロや室内楽活動も積極的に行っていらっしゃいます。伴奏の前島園子さんは、オーストリアのモーツァルテウム音楽大学の講師の他、ヨーロッパを中心に活躍されているピアニストです。

曲目については、徳永氏と相談の上、大変良く知られている名曲ばかりを15曲、徳永氏の御希望もあり、豊かな響の音の良いホールとして評判の洗足学園前田ホールで8月28日・29日の両日に渡って、アナログ録音とCD用のデジタル録音を行いました。(デジタル録音は、DAMオリジナルCD・「徳永二男⊙チゴイネルワイゼン」DOCD-0006として発表いたしました。)

15曲70分を越える録音とあって、両日とも9時間以上のハード・スケジュールでしたが、徳永氏の永年培われたプロとしての実力と、超人的なスタミナ、そして前島さんの息のあった絶妙なサポートで、素晴しい演奏を予定通り無事レコーディングすることができました。

小品とはいえ、パガニーニをはじめ、超絶技巧を必要とする、難曲の数々が、徳永氏の磨きぬかれたテクニックと、洗練された美しい音で、収録されています。

ところでCDの普及につれて、残念なことに、クラシックのアナログ録音が、世界的に少くなりつつあります。これは、デジタル録音が、アナログ録音より〝音〟の点で優れているから、と巷間いわれているようですが、むしろ、デジタル録音の方がCDを製作するためには、適しているという商業的な理由が大きいのではないかと思われます。そして同時発売のLPにも、そのデジタル・マスターを使ってカッティングすることが多いのが現状です。

そのような中で、DAMがオリジナル録音をする際、必ずアナログとデジタルの両方式で録音しているのは、現在のデジタル録音(16ビット、44.1KHz)より、アナログ録音の方が、〝音〟の点で総合的には優れていると判断しているからです。(最近、国内某社が、20ビット、96KHzサンプリングのデジタル・マスター・レコーダーを開発するという発表をいたしましたが、これも、プロの録音現場サイドが、デジタル録音のサウンド・クォリティをアップしたいという要望を出しているからでしょう。)

もっとも½インチ・76cm/secのアナログ録音では、テープ費用だけでもデジタルのビデオ・テープの4倍以上ですし、更にDAM45用のアナログ編集と、CD用のデジタル編集との両方のため、2倍の時間と費用が必要となります。しかし、これも最近では殆んど市販されることが無くなった、スーパー・アナログ・ディスクとして、出来る限り音質の向上をさせたいという、DAMの制作ポリシィに他なりません。

その優秀なアナログ録音を、レコード化するプロセスを慎重に行わないと、情報をロスしてしまい、プレスされたレコードが、マスター・テープとかけ離れた無残な音になりがちです。そこで、今回、カッティングにあたっては、録音当日の½インチ・76cm/secのマザー・テープを鋏により若干の編集作業をしただけで、ダビングや音の加工は一切しておりません。又、録音に使用したテープレコーダーをそのままカッティング時の再生送り出しにも使うというシンプルで理想的な形をとり、11曲55分を4面に余裕をもって、ノンイコライザー、ノンリミッターで、ハイレベル・ストレート・カッティングいたしました。

なお、今回のカッティングで、先行ヘッドによるサーボ・メカを使用しない、シングル・ピッチ・カッティング(昨年の「トッカータとフーガ76/45」SIDE 2がシングル・ピッチです。)をテストしてみましたが、カッティング・レベルをかなり下げなくてはならない等の問題が生じましたので、トータル的な判断から、ヴァリアブル・ピッチでカッティングとなっています。

その後のメッキ、プレス工程でも、東芝EMI㈱の最新技術とノウハウが惜しみなく投入されて、このアルバムが完成いたしました。

オーディオ的な聴きどころとしては、録音上、バランスをとるのが大変難しいとされている、ヴァイオリンとピアノのデュオが、ワンポイント録音ならではの、ナチュラルなプレゼンス豊かな音場で再現されるかどうか。徳永氏のストラディヴァリウスの美しい音色と前島さんのスタインウェイの豊麗な響、そして演奏の熱気が、大変リアルに、余すところなく伝わってくるかどうか。

予想外にダイナミックレンジの広いヴァイオリンの音が歪なくトレースできるか、また、デリケートな余韻が、ホールの空間に融け込んでゆく様子が聴きとれるか、等がチェック・ポイントといえましょう。

それでは、このヴァイオリン名曲アルバムを心ゆくまでお楽しみくださいますよう、そして皆様のレコード・ライブラリーの一枚に加えていただければ幸いです。

なお、今回のアルバム作成にあたり、徳永二男氏、前島園子さん、洗足学園、東芝EMI㈱、ならびに関係各位に多大な御協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

今後もDAMといたしましては、アナログ、デジタルを問わず、より良い音楽ソフトを開発し会員の皆様に少しでもお役にたてるよう、更に一層の努力をする所存ですので、今後とも皆様のご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

DAM推進委員会 DAM PC

STEREO DOR-0144-5

DAMPC

●ヴァイオリン名曲集　愛の喜び・ユーモレスク

徳永二男/チゴイネルワイゼン76/45

徳永二男(ヴァイオリン) 前島園子(ピアノ)/全11曲(55'03")

side 1

1. チゴイネルワイゼン 作品20-1(サラサーテ) 7'59"
2. スペイン舞曲(ファリャ～クライスラー編) 3'15"

side 2

1. ラ・フォリア 作品5-12(コレルリ) 10'37"
2. ユーモレスク(ドヴォルザーク) 3'05"
3. 亜麻色の髪の乙女(ドビュッシー) 2'37"

side 3

1. モスクワの想い出 作品6(ヴィエニアフスキー) 7'36"
2. カプリース第24番 作品1(パガニーニ) 4'06"
3. 愛の喜び(クライスラー) 2'56"

side 4

1. 序奏とロンド・カプリチオーソ 作品28(サン=サーンス) 8'40"
2. ハンガリア舞曲第5番(ブラームス) 2'30"
3. 美しきロスマリン(クライスラー) 1'47"

ヴァイオリン音楽の魅力を堪能できる選曲と、みずみずしい演奏です。

——このアルバムのこと　柴田龍一

このアルバムのこと

ヴァイオリンという楽器は、さまざまな楽器のなかでもピアノと共に最も広く親しまれることとなっていますが、その魅力や持ち味は、ヴァイオリンの旋律楽器としての特性にその殆んど大部分が由来するものといえましょう。そして、多くの種類の旋律楽器のなかで王者としての位置を占めているヴァイオリンは、単に甘美な歌を歌い継ぐだけでなく、実にヴァラエティに富んだ表現力を誇る楽器といえますが、ヴァイオリンのその多彩で豊かな表現力は、古くから大作曲家たちを強く惹き付け、彼らに数多くの名作を生み出させることとなってきました。

このアルバムには、バロックから近代に至る作曲家たちの作品が収録されていますが、これらは、数あるヴァイオリンのための名曲のなかでも特に魅力的で秀れた作品といえるものばかりで、以前から幅広く根強い人気を保ち続けている名作中の名作ばかりです。ここでは、誰の心をも捉えずにはおかない名旋律の数々だけでなく、スタッカート、ピチカート、ダブル・ストッピング等のヴァイオリンの技巧を巧みに生か

した華やかな名人芸などを心ゆくまで味わうことができますが、これこそは、ヴァイオリン音楽ならではの楽しみに他なりません。

そして、このアルバムのもう１つの魅力は徳永二男の力強くすがすがしい快演にあるといえましょう。我が国ヴァイオリン界のホープとして活躍を続ける徳永は、稀にみる卓越したテクニックと若々しくみずみずしい表現力をその持ち味としたヴァイオリニストですが、彼の説得力に溢れる名技は、ヴァイオリンの名曲の数々からその魅力を存分に引き出すまでにも至っています。そして、名曲の名演奏を収録したこのアルバムは、最新録音ならではの鮮やかな音質とも相俟って、きっとヴァイオリン音楽の醍醐味を堪能させてくれることとなるに違いありません。

曲目について

・サラサーテ：チゴイネルワイゼン

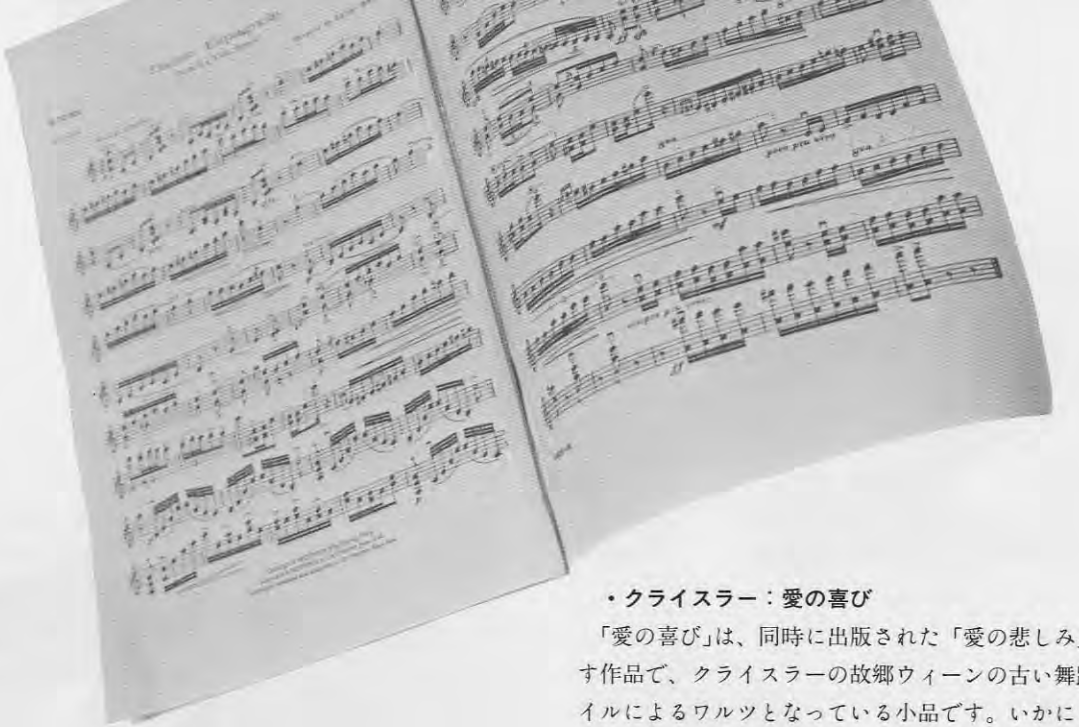
P.D.サラサーテ（1844―1908）は、パガニーニと並び称せられる19世紀スペインが生んだ大ヴァイオリニストで、自らが演奏するために技巧的なヴァイオリン曲の数々を作曲しています。そして、彼の代表作として名高いこの「チゴイネルワイゼン」は、ジプシーの音楽に取材した作品で、ヴァイオリンの輝かしい名人芸が展開されるなかに、生々しい情熱や愁いに充ちた抒情をふんだんに湛えた魅力的な傑作です。

・ファリャ：スペイン舞曲

M.D.ファリャ（1876―1946）は、フランス印象派音楽の影響を採り入れた独自の民族主義的作風によって知られるスペインの作曲家です。そして、歌劇「はかなき人生」はファリャの出世作となった作品ですが、その第２幕のはじめで演奏されるこの「スペイン舞曲」は、豊かな民族色とダイナミックな起伏に富んだ音楽で、オーケストラのためのピースとしてだけでなく、ピアノやヴァイオリンのための編曲によっても広く親しまれています。

・コレルリ：ラ・フォリア

A.コレルリ（1653―1713）は、バロック後期に活躍したイタリアの作曲家、ヴァイオリニストです。そして、コレルリの代表作として知られるこの「ラ・フォリア」は、1700年にローマで出版された12のソナタ集の第12番にあたるもので、ソナタとはいうものの、主題とその変奏でまとめられている楽曲です。ちなみに、フォリアとは、ポルトガルに起源をもつゆったりとした舞曲のことですが、ここでは、そのフォリアの旋律が主題として用いられています。



・ドヴォルザーク：ユーモレスク

A.ドヴォルザーク（1841―1904）は、チェコスロヴァキアの国民楽派を代表する作曲家として有名な人物です。そして、ヴァイオリンのための編曲によって親しまれているこの「ユーモレスク」は、ユーモラスな独自のリズムと素朴にして甘美な旋律の美しさを特徴とした小品です。なお、この作品は、1894年に作曲されたピアノのための８つのユーモレスクの第７番をその原曲としています。

・ドビュッシー：亜麻色の髪の乙女

C.A.ドビュッシー（1862―1918）は、印象派音楽のパイオニアとして知られる近代フランスの作曲家です。そして、全12曲より成るピアノのための前奏曲集第１巻は、そのドビュッシーの代表作の１つに挙げられる作品ですが、その第８曲にあたるこの「亜麻色の髪の乙女」は、簡素な旋律と自在なハーモニーを特色としたいかにも印象派の作品らしいユニークな１曲で、ヴァイオリンをはじめとするさまざまな楽器のための編曲によっても広く愛聴されています。

・ヴィエニアフスキー：モスクワの想い出

H.ヴィエニアフスキー（1835―1880）は、ポーランドの生んだ19世紀を代表する大ヴァイオリニストで、作曲家としてもロマンティックなヴァイオリン曲の数々を手掛けています。そして、ヴィエニアフスキーが18歳の時に作曲したといわれるこの「モスクワの想い出」は、有名な「赤いサラファン」というロシア民謡の旋律を素材とした一種の幻想曲でヴァイオリンの華やかなテクニックと甘美な表現力の双方が生かされた小品となっています。

・パガニーニ：カプリース第24番

N.パガニーニ（1782―1840）は、超人的なテクニックを誇るイタリアの生んだ伝説的なヴァイオリンの名手で、自らが演奏するために超絶的な技巧をふんだんに盛り込んだヴァイオリン曲の数々を作曲しています。そして、ヴァイオリンのための24のカプリースは、パガニーニの代表作として有名ですが、単独でも演奏される機会の多いこの第24番は、主題とその11の変奏によってまとめあげられている大規模な小品です。

・クライスラー：愛の喜び

「愛の喜び」は、同時に出版された「愛の悲しみ」と対をなす作品で、クライスラーの故郷ウィーンの古い舞踏歌のスタイルによるワルツとなっている小品です。いかにも愛の喜びを想わせる輝かしくロマンティックな味わいのなかに、ウィーン子クライスラーならではの優美で暖かい情感が息づいている珠玉の１曲といえましょう。

・サン＝サーンス：序奏とロンド・カプリチオーソ

C.サン＝サーンス（1835―1921）は、ピアニスト、オルガニストとしても華々しい活躍を続けていた近代フランスの作曲家です。そして、スペインの大ヴァイオリニスト、サラサーテによって初演されたこの「序奏とロンド・カプリチオーソ」は、さまざまなヴァイオリンの技巧が盛り込まれた演奏効果の高い小品で、サン＝サーンスならではのエスプリに充ち溢れた優雅な味わいや、多彩な変化に富んだ華麗な曲想などがたいへんに魅力的な名作です。

・ブラームス：ハンガリア舞曲第５番

ジプシーの音楽に高い関心を寄せていたJ.ブラームス（1833―1897）は、ピアノの連弾のために「ハンガリア舞曲集」をまとめあげましたが、この曲集は、後にオーケストラのためにも編曲され、爆発的な人気を博すこととなりました。そして、そのなかでも特に人気のあるこの第５番は、エキゾティックな色彩感とエネルギッシュな曲想がまさに絶妙な一致を遂げた名作で、ヴァイオリンのための編曲によっても広く親しまれています。

・クライスラー：美しきロスマリン

今世紀前半を代表する大ヴァイオリニストの１人であったF.クライスラー（1875―1962）は、作曲家としても多彩な活動を展開した人物ですが、なかでも自らが演奏することを目的に作曲された多くの小品は、いずれも親しみ易い魅力に富んだ傑作です。一方、ロスマリンとは、香り高い花を咲かせる「まんねろう」のことですが、愛らしい女性の愛称ともなっています。そして、この「美しきロスマリン」は、清らかな乙女に託したクライスラーの思い出といった性格が著しいロマンティックな小品です。

すばらしい音楽をつくるための熱気、肌で感じる体験でした。

――レコーディング・レポート　樋口美幸

レコーディングレポート

8月28日。ここは洗足学園前田ホール。素敵な音楽に逢えるうれしさ半分、レポーターとしてのプレッシャー半分で、私、もうドキドキしています。

午前9時に機材の搬入が始まり、レコーディング準備に約2時間。

11時。徳永二男さん、前島園子さんがお見えになって、その20分後には早速リハーサルが始まりました。

テストにテストを重ね、何度も何度もピアノとマイクの位置を変えて……。これはヴァイオリンの自然な柔らかい音、暖い音を再現するためのセッティングです。

レポーターの樋口さんは、いつもはイベントのコンパニオンやファッションショーの司会などで活躍されているお嬢さん。
今回は、レコーディングという彼女の初めての体験を通して、若く、新鮮な目で演奏者のお二人を追っていただきました。

――この前田ホールは、今回、徳永さんご自身が特に望まれたホールだそうですが？

徳永「僕の所属しているN響がこのホールでこけら落としをしました。ここはいいんだよね。少し小さめだけど奥行き、幅、この箱形。音の反響を体で確かめられ、安心して演奏できる。クラシックのために造られたホールだしね。」

演奏中の表情とまったく違うんです。笑顔がとっても素敵で……。第一印象もそうでした。陽によく灼けて、ヨットがよく似合いそうなスポーツマンタイプで。

そういえば、徳永さんはファンクラブをお持ちなんですよね。クラシック界ではあまり例がないんじゃないかしら。

活動のメインは会員のためのサロンコンサート。その他にも夕食会や誕生会。また、録音されたものを優先的に分けていらっしゃるとか。コミュニケーションをとっても大切にしたファンクラブの様です。徳永さんファンの方にはぜひおススメしたいですね。

3時間もの念入りなリハーサルを経て、ピアノとマイクのセッティングは完璧。さぁ、本番の開始です。

ミキシングルームは静まりかえり、緊張感に空気はピンと張りつめたよう。そして、いきなり、美しく調和された音楽が広がって……。それが……何て言葉にすればいいんでしょう……ただ感激。泣きたくなっちゃうくらいに。心がきしむくらいに。押し寄せてくる感動で倒れそうです。五感で音を感じます。……なんて素敵。

レコーディングはというと、演奏者とスタッフ両者の納得ゆく音探し。求める音が録れるまでは絶対妥協なんてしません。一曲あげるために、ステージとミキシングルームを何度も往復し、プレイバックされたものを聴き、細かいチェックを入れる演奏者とスタッフ。静かで張りつめた空気の中にもたいへんな熱気。

そんな録音の合間に伺ったお話です。

――お二人とも桐朋学園のご出身だそうですが。

お二人「そうそう。」

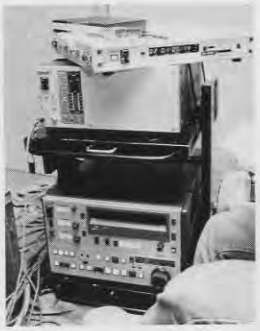
前島「あの頃は厳しい授業だったわね、実技重視で。」

――今は？

徳永「生徒が平均化され、ムラは無くなり、ツブは揃っているけれど、パーソナリティーが無くなってきてるよねぇ。

僕は斎藤秀雄先生に意識的に育てていただいた。そういえば、いい指揮者というのは、いい音楽づくりをするよね、いろんな意味で。」

前島「そうね。音楽づくりって、一言でいえば〝強さ〟ね。それはたとえ亡くな



っても残るものだし。」

———いい先生というのは、どういう先生ですか？

徳永「いい先生っていうのは生徒への要求度が高いね。だから生徒はそのレールの上に来るまでがすごく大変なんだ。」

———前島さんは？

前島「ええ、井口愛子先生に。言葉は厳しいけれど、やっぱりいい先生なのよね。」

———ところで、外国のいろんな方とも協演されていますが、特に印象に残っているもの、ありますか？

徳永「う～ん。いろいろな印象はあるし、一言ではいえないよ。そうだなぁ…、先年亡くなられたロヴロ・フォン・マタチッチという指揮者と協演した事があるんだけど、その時はもう随分お年を召されていて、ツアーの途中で松葉杖から車椅子に変わるくらい体力的にも大変でね。でも指揮棒を振る彼の意図はなぜか驚くほど伝わってくるんだ。スゴイよ。」

———徳永さんはN響のコンサートマスターでいらっしゃいますが、コンサートマスターってどんな事をなさるんですか？

徳永「弓の上げ下げの指示。そして指揮者とみんなのパイプ役だな。オーケストラって、指揮者がいて、一番前に弦楽器があって、木管、金管そしてパーカッションでしょ。そんな音の距離感を無くしてあげる役。信用で結ばれていなければならないね。」

———ご使用のヴァイオリンはストラディヴァリウス・バロン・オッペンハイマーですね。

徳永「別にストラディヴァリウスだから使っている訳じゃあないんだよ。ただ〝もう少しいい楽器だとこの音はもっと綺麗に出るのに〟というのが重なり重なり、行きつくところがストラディヴァリウス。表現力が豊かだし、自分の要求度に応えてくれる。健康な楽器だよね。」

———ヴァイオリンって、とってもデリケートな楽器だそうですが……。

徳永「そう。湿度、気圧に凄く敏感。ヴァイオリンで次の日のお天気がわかる程だよ。湿度が高いと、弓をおく高さ、魂柱（こんちゅう）も変わってくる。弓っていうのは馬の尻尾で出来てるんだけど、湿度のひどく高い時は、長さが2センチも変わっちゃうくらいだ。」

それにしても、本当に素敵な方々なんです。自分に厳しく人には優しいっていうのかしら……。言葉の端々にそんなものが感じられるんです。

さて、その後も録音は精力的に続けられ、演奏も凄い盛り上がりを見せてくれます。そして、丁寧に丁寧に、一曲づつが仕上がってゆきます。

二日目。10時半には録音開始。前日からの盛り上がりがずうっと続いていて、とても順調に進みます。うわぁ、昨日と同じ緊張感と熱気。〝いいレコードを作りたい〟という全員の気持ちが肌に伝わってきます。

私はただただ驚きっぱなし。だってそうですよね、今まで何気なく買っていたレコード、その制作が、こんなに大変だなんて思いもよらなかったのですから……。

それにしても皆さん、タフです。特に徳永さんは。「まる二日の録音、ペース配分を少し心配したけど、スタミナが持ったよ。適度な緊張感を持つ、納得できる録音だったな。」そう、後でにこやかにおっしゃっていましたが。

レコーディングを始めて何時間経ったのかしら。〝時間の経過が早いのか遅いのかわからないな。〟なんて思う頃、全曲が完成しました。

午後7時20分。最後のチェックをしている演奏者とスタッフ。まわりの空気は二日間の張りつめたものから穏やかなものへと、ゆっくり変わってゆきます。終了。ホッとした様な、もっと聴きたいなぁと残念なような……。

———前島さん、お疲れ様でした。このレコーディングを終えてのご感想を。

前島「和気あいあいとして、いい雰囲気でやりやすかったですね。」

———世界を股にかけて大変なご活躍ですが、ピアノはヴァイオリンみたいに持ち運び出来ませんし、その時その時で良かったり悪かったりしませんか？

前島「以前は、このピアノは弾きやすいとか弾きにくいとか思っていましたが、今は段々と合わせる事が出来るようになりました。」

———じゃ、技術の他にもそういう事が要求されるという事ですか？

前島「いいえ、それが技術なんです。」

———オーストリアを始めとした海外で演奏する時と、日本での時と、何か違いみたいなものはありますか？

前島「そうね。観客との会話かしら。演奏する事によって話しかけて、聴くことによってお客様も応えてくれて。その会話が楽しいですね。ただ、日本ではまだクラシック音楽の歴史が浅いせいか、その会話があまり……。もっともっと会話したいって思います。」

———数日前に日本にいらっしゃったばかりですが、失礼ですけど時差で大変じゃ……。

前島「今年はもう4～5回往復しているので、時差ボケボケです。(笑)10月にザルツブルクへ帰ったら、今年はもうゆっくりする予定です。」

———個人的ですが、二日間、耳に体に気持ちよくって。素晴しい音楽が聴けて、とっても嬉しくって。

前島「そういってもらうと嬉しいですね。結局そうなんです。好き、嫌い、耳に気持ち良いかどうか——なんですね。」

前島さんて、女性らしい優しさに溢れる素晴しい方です。音楽を離れると、著名なピアニストというより、山の手の優しいお花の先生というイメージ。同じ女性として憧れます。私もいつかは、こんな素敵な女性になっていたいって、心から思います。

スポットに照らされたステージでは、最後のジャケット写真の撮影が行なわれています。それを見ながら、この二日間の貴重な体験をかみしめます。

想像していたものをはるかに越える、素晴しい音楽のディナーでした。ただ、それを真から味わうだけの舌を持っていない自分を、少し悔しく感じます。そして、このレコードを手にされる方には、この一枚のレコードの重みを、ぜひ感じて頂きたいって、今、心から思っています。

スーパー・アナログ・ディスクの使命と、真剣に取り組んでいる。

——DAM45のめざすところ

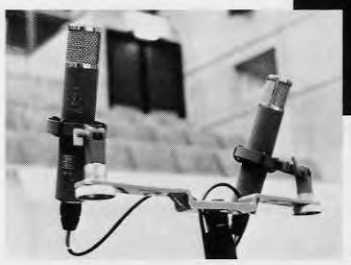
江川三郎

ヴァイオリンのE線（最高音弦）にアジャスターと呼ばれる弦の張力微調整メカニズムがあるのをご存知だろうか。これは弦がガットからスチール弦に変った時に工夫されたものだ。尋ねてみると第一次と第二次世界大戦の間に生まれたという。1910年代のことであろう。長いその歴史のなかからいえば新しい出来事である。

このアジャスターは弦の振動部分に直列的に入っているからその音質に与える影響は非常に大きい。いくつかのメカニズム方式があるが、中でも英国のヒル＆サン社のものがコンパクト設計、つまり小ムービング・マスで評価できる。古典時代のように無い方が音がよいのだが、専門家はアジャスターが無いと音程がとれないという。実際にアジャスター無しで弾くと私でも音程は別にしてプロっぽい音を出すことが出来る。それではこの改良ということで、ヒル社の可動部と軸を超硬金属で試作した。こうするとメカニズムの撓みが少なくなるので誰の耳にも音質は好ましい方に変る。いや古典のヴァイオリンに近づくわけだ。改良品は私の理屈通りに作用しはじめたと考えている。この試作のアジャスターをよかれと思いヒル社に送った。ところが、社長のヒル氏から「もはや変更したアジャスターはオリジナルでない。このような真似は許せない」という怒りの手紙が返って来た。問題提起の私の考えが先方に伝わらなかった。そこで私の考え方の説明と試作品の引き取りに英国に出かけて行った。

DAMレコードのオリジナル・レコーディングは対象の音楽の種類によってその都度新しい工夫と試みがこらされて制作されている。これは愛聴の皆さんにとっても私にも音楽とオーディオに拘る事がらに大へん勉強になることである。出来るかぎり見学をしたいと考えている。残念なことに私が英国をウロウロしているうちに今回の徳永二男さんのリサイタ

ノイマン SM-69



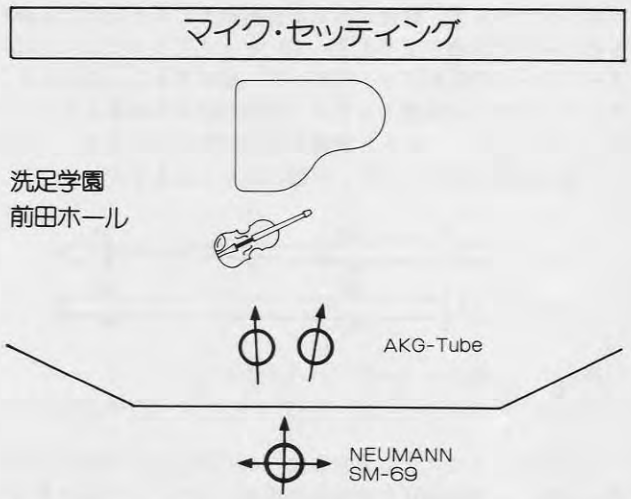
AKG TUBE

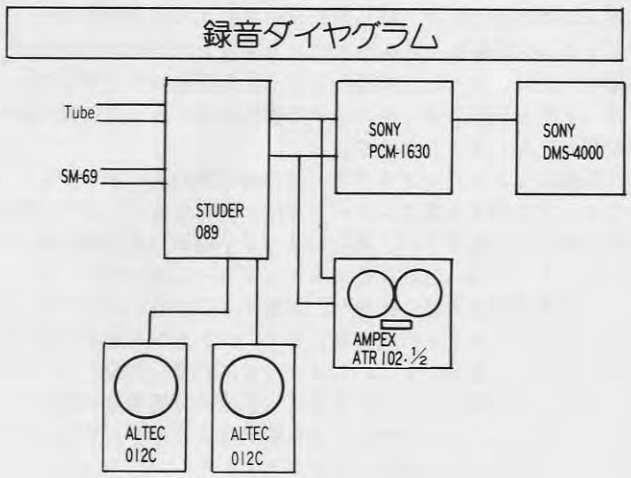
ル録音セッションは終ってしまった。残るはカッティング・プロセスのみである。

カッティングは縦に置くと液体が流れて落ちそうな感じの極めて平滑面を保ったラッカー盤（アセテート・コーティング面）に溝を刻んでゆく作業である。基本的にはこの作業工程は録音と全く同じの慎重さが要求されるのだ。現に大昔のＳＰレコードの録音は磁気テープの工程が得られなかったから音楽の現場から直接このカッティングに至るわけである。いわゆるダイレクトカットであるのだ。そこにはマイクの配置と溝に刻む作業が同時に行なわれるから大変なむずかしさがあるわけだ。

現に今回のカッティング作業中にも一つの事件というか、愛聴者にはありがたい事がらが起ったのである。ＤＡＭレコードの一つのポリシーでもある比較的にローコンプライアンスのカートリッジでも針飛びせずに、それでいて出来得る限り大振幅でカッティングするという二律背反の条件を満すべくエンジニアの竹内氏は努力する。その働く姿勢には日常的な作業要領を越えた真剣さが感じられる。単にＤＡＭスタッフや音のウルサ方が立会っているからでなく、ＤＡＭレコードだからこそやりがいがあるということがその慎重で機敏なうごきから感じられる。

特だねとはこういうことだ。現在のレコードは全て弱音と強大音量時は異なった溝巾で刻まれている。ヴァリアブル・ピッチといわれる方法だ。これによってＬＰレコードはその長時間演奏のメリットを高められたのである。ところがこの効用を求め過ぎると音質は悪くなる。音質ばかりでなく、演奏の気迫が薄くなるのだ。今回のカッティング処理ではテスト時に最もレヴェルの低い(演奏時間は長いが)第２面でこのヴァリアブル・ピッチをＯＦＦにする試みがなされた。場の奥行き感、定位した音像のより濃い現実感が素晴しい。さてよい音を聞いたらもう後もどり出来ない。一同の視線がカッティングの竹内氏に注がれる。ヴァリアブル・ピッチをコントロールする先行テーププレーヤーのスチューダーＡ80の出力アッテネーターをレベルに応じて細かくコントロールしはじめる。必要最少限に溝のつめ込効果を押えるためだ。一般的にいえば贅沢な処理をされたレコードである。だがこの盤面には演奏家をはじめ制作スタッフの熱意が込められていることに間違いがないことだ。ヴァリアブル・ピッチ処理の大変さはこの一例にすぎないことだが、私が聴きそこなった録音現場でも残響のたっぷりとした前田ホールでペア・マイクのみでソロと伴奏のバランスを録り得たことはＤＡＭレコードでは当然の処理といえ立派な仕事といえよう。われわれ愛聴者も再生音のなかからこうした微妙なバランス感を受け止めたいと思うのである。芸術ばかりでなく微少な範囲、見逃してもよい些細な現象、これらを一つずつ正しい方向にもってゆき積みあげてゆくことで大きな価値が生まれてゆくと信じている。ＤＡＭレコードの音についてのこだわりもそうだし、私がヴァイオリンのアジャスターにうるさく言うのも同じことだと思っている。





DAMハイクォリティ・レコードについて

最近のデジタル・オーディオ技術とその周辺技術の急速な進歩で、ビデオ・ディスク及びコンパクト・ディスク(CD)の開発技術によって得られた製盤の技術とノウ・ハウを最大限に駆使し、従来のマスプロ的仕様とは性格の異なる、手作り的なプロセスを経て制作されたものが今回のDAMレコードであります。

オーディオ・マニア諸氏はもちろんのこと、音楽ファンの皆様も年2回企画されているDAMレコードについては、常に新しい試みがなされ、前向きな姿勢で技術的テクニックとそのトーン・キャラクターを追求し、より忠実な音楽の再現を制作ポリシィーとしている意図を理解していただいていることと思います。

そこで今回のハイクォリティ・レコードの特徴を述べてみます。

レコード(フラット・ディスク)形状

一般レコード形状は、音溝部を保護する為にレーベル部とレコード周縁部にグルーブガードをほどこして、音溝部が直接に接触しない様に厚くなっております。これが一方では、レコード再生条件や音質への影響を考慮した場合必ずしも望ましい形状では無いようです。

例えばa）グルーブガードの傾斜している溝部に再生針先が正規な溝壁面接触しないままトレースする為に、異状音の発生やノイズの発生原因となります。b）ピックアップを下す時ヘタをすると、針先が滑って音溝部までジャンプする事もありキズの原因となります。c）ピックアップによっては、カートリッジの底がグルーブガードに接触することもあります。d）音質への影響としては、断面形状から解るように、ターンテーブル・シートと音溝部の密着性が悪くなり、レコード個有共振を起こしやすい状態にあると云えます。

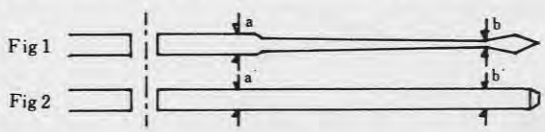


Fig 1　一般のレコード　a−b=0.6〔mm〕
Fig 2　新フラットレコード(ディスク)a'−b'=0.2〔mm〕

御存知のようにステレオ音溝は、水平振幅は左右信号の和(L＋R)、上下振幅は左右信号の差(L−R)として録音カッティングされており、特に本レコードのように通常のレコードより＋5dB程もハイレベルでカッティングされた複雑な音溝の再生は、より以上のカートリッジの振動エネルギーでレコード盤を烈振させ、レコードの個有共振によって音質への影響が充分に考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの個有共振はレコードを厚く重くすることでマス成分を増して共振を下げ、更にレコード平面均一性の精度を上げ、フラット面に形状変更することでターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、共振によるレコードとターンテーブル・マットとの間に起こるリアクションを緩和させる事を可能にしました。これにより今までに無いサウンド・キャラクターが得られ、特に中域から低域の分解能を一段とクリアーにして、そのナチュラルな響きはよりオリジナル・サウンドに近いものと確信しております。

ターンテーブル及びターンテーブル・マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状質量によっても音質へ影響するファクターは充分考えられますが、今回のこのレコードは特に再生条件を考慮した上で新フラットプロフィールを採用致しました。

■一般レコードとの比較

重　量　比		30%up
厚　さ　比	最　厚　部	15%up
	最　薄　部	65%up

更に偏心の要因の1つであるセンターホールとプレーヤーのセンターピンとのガタについて注目し、先ず市販プレーヤーのセンターピン寸法を調査してその結果でレコードのセンターホールの設計変更を行い、最小限ガタツキを減らす為にセンターホールの径を小さい方向に持って行きました。

クォーツ・ロック、厚手レコードについて

従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター（ダイナミック・ワウ）が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の“DAM45”では、高精度にサーボされたクォーツ・ロックD.D.モーターとダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスタリング時に於けるクォリティーを高め、以前にまして余裕のある音溝巾と大振幅にたえられ、たっぷりとしたピッチでディプスがコントロールされるようになりました。

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリニアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅(P-P) 250μ〜280μ、〔L-R〕、ピーク・レベル＋20dB程度のものは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波形を完全にトレーシングする為に再生時の技術的ノウ・ハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かずかずのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェル、トーン・アームやターンテーブル・シートの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このように再生時の高忠実トレーシングはさまざまな問題が残されています。

それでは、ディスクそのものはどうかと考えますと、一時期、薄いレコードはプレスでの塩ビ成形性が良いとされ話題になりましたが、レコードを厚くする（質量を増す）ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアーになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分にお楽しみ下さい。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれ、リアリティーの良いダイナミック・レンジをもつオリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33⅓回転レコードと変った点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。

(2)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33⅓回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意をして下さい。

(3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃〜20℃位に保って下さい。

(4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧（メーカー指定の重い方にセット）には充分気を付けて下さい。

(5)このレコードは、ハイクォリティーのオーディオ・チェック・レコードのため、カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質——プロユース材料使用

再生にあたって、カートリッジやアームによっては、トレースが難かしい場合もあります。特に冬に向って、室温は20℃前後、針圧は、指定の範囲で重い方にセットしてください。又、曲によっては、ハイレベル・カッティングのため、一部ゴーストがありますが、御了承ください。

カッティング・データ

Cutting Date: 19 & 24 Sept. 1986
Toshiba-EMI Akasaka
Tape Recorder: AMPEX ATR-102-½
Drive Amplifier: Neumann SAL-74
Cutting Lathe: Neumann VMS-80
Diamond Cutting Stylus
Cutting Head: Neumann SX-74
Non Limitter
Non Equalizer

スタッフ

総合プロデューサー	：小山正敏、八田甫
プロデューサー／ディレクター	：里見清司
バランス・エンジニア	：池田　彰
カッティング・エンジニア	：竹内昭五
ピアノ・チューナー	：藤村周作
ジャケット	：㈱グラバー企画
フォトグラファー	：伊藤　隆
制作協力	：洗足学園
録音場所	：洗足学園前田ホール
録音年月日	：1986年8月28、29日
企画・制作	：DAM推進委員会 DAMPC
製造	：東芝EMI株式会社